

方剂名	効能	生薬組成
書籍	主治および証	病機 方意
治燥剂 軽宣潤燥剂 5		
しゃじんぼくとうとう 沙参麦冬湯	清養肺胃・生津潤燥	沙参 9g・玉竹 6g・生甘草 3g・桑葉 4.5g・麦門冬 9g・生扁豆 4.5g・ 天花粉 4.5g 水煎し服用する。
温病条弁	<主治> 肺胃津傷 微熱あるいは平熱、口渴、咽の乾燥、乾咳、少痰、舌質が紅で乾燥、少苔、脈は細やや数などを呈す。 <病機> 温熱病の気分証の後期で、熱邪が消退して肺胃の津液消耗が残った状態である。 温熱の邪が肺胃の気分を侵襲し熱が熾盛になって傷津し、邪熱が消退した後に傷津が残存しており、口渴、咽の乾燥、舌の乾燥、少苔、脈が細を呈し、肺燥気逆による乾咳、少痰を伴う。胃燥気逆の場合には、乾嘔、食欲不振などがみられる。微熱、脈がやや数、舌質が紅などは、陰虚内熱を表わす。 <方意> 甘寒の薬物により肺胃を清養する。 甘寒の沙参・麦門冬・玉竹・天花粉は、生津滋潤すると共に肺胃の熱を清する。生扁豆・生甘草は、胃気を扶養して津液の滋生を補助する。軽清宣透の桑葉は、肺熱を宣散止咳する。全体で清養肺胃、生津潤燥の効果が得られる。 <参考> 温燥による肺胃の津液損傷に用いる。 久熱久咳には、清肺、清虚熱の地骨皮を配合するように指示されている。	
えきいとう 益胃湯	滋養肺胃	沙参 9g・麦門冬 15g・氷砂糖 3g・生地黄 15g・玉竹 4.5g 水煎し服用する。
温病条弁	主治は肺胃津傷で、陽明温病を瀉下と汗によって傷津したときに本方を用いている。 諸薬はすべて甘寒生津に働き、滋養肺胃の効能をもつ。 本方（益胃湯）は、沙参麦冬湯と効能がほぼ同じであり、沙参麦冬湯は軽宣にも働いて肺に重点があり、本方（益胃湯）は軽宣の効能は無く胃に重点がある。	